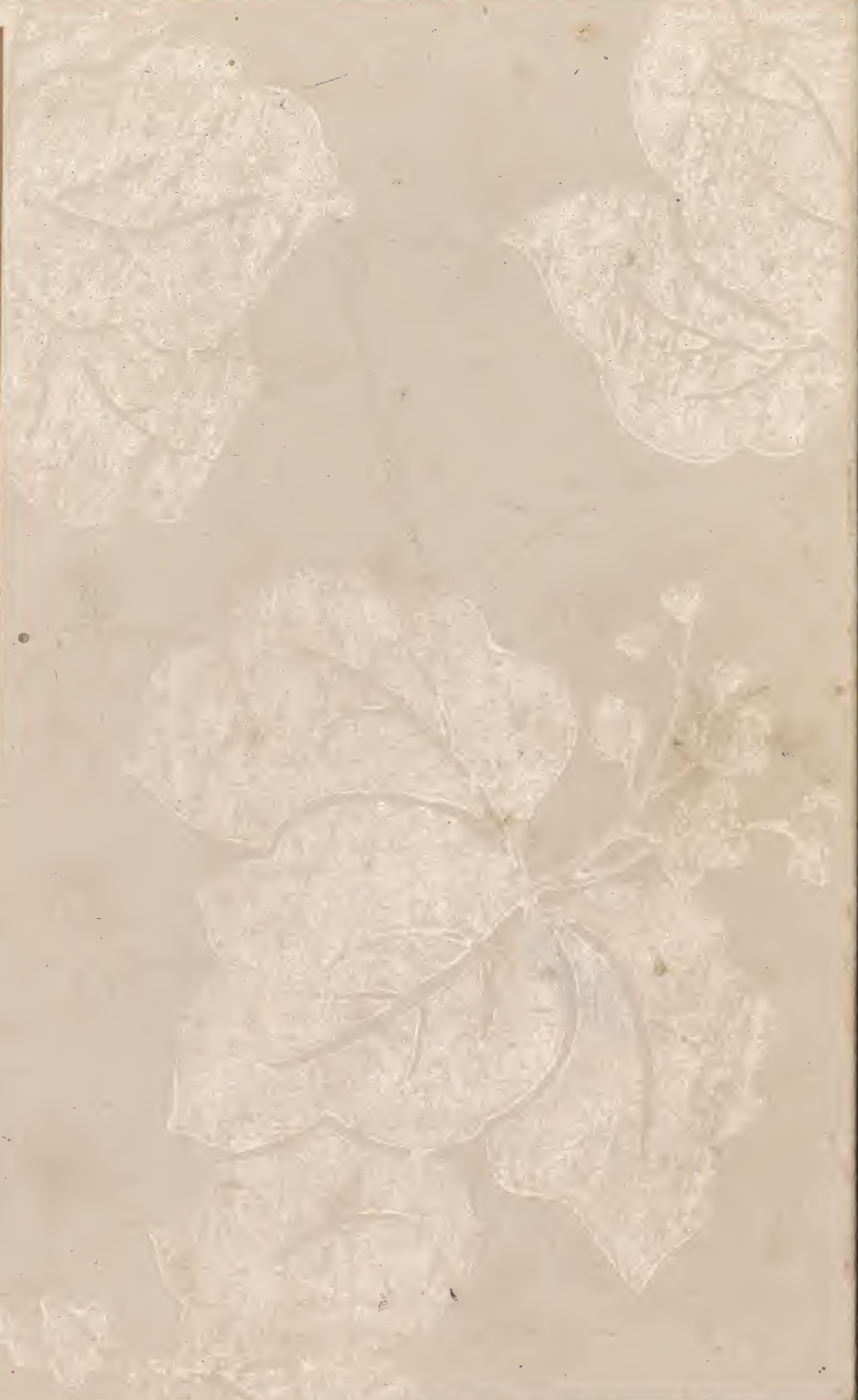


梅
人



松もめく世中をく心乃

有るかむるわ 是ハ甲斐國

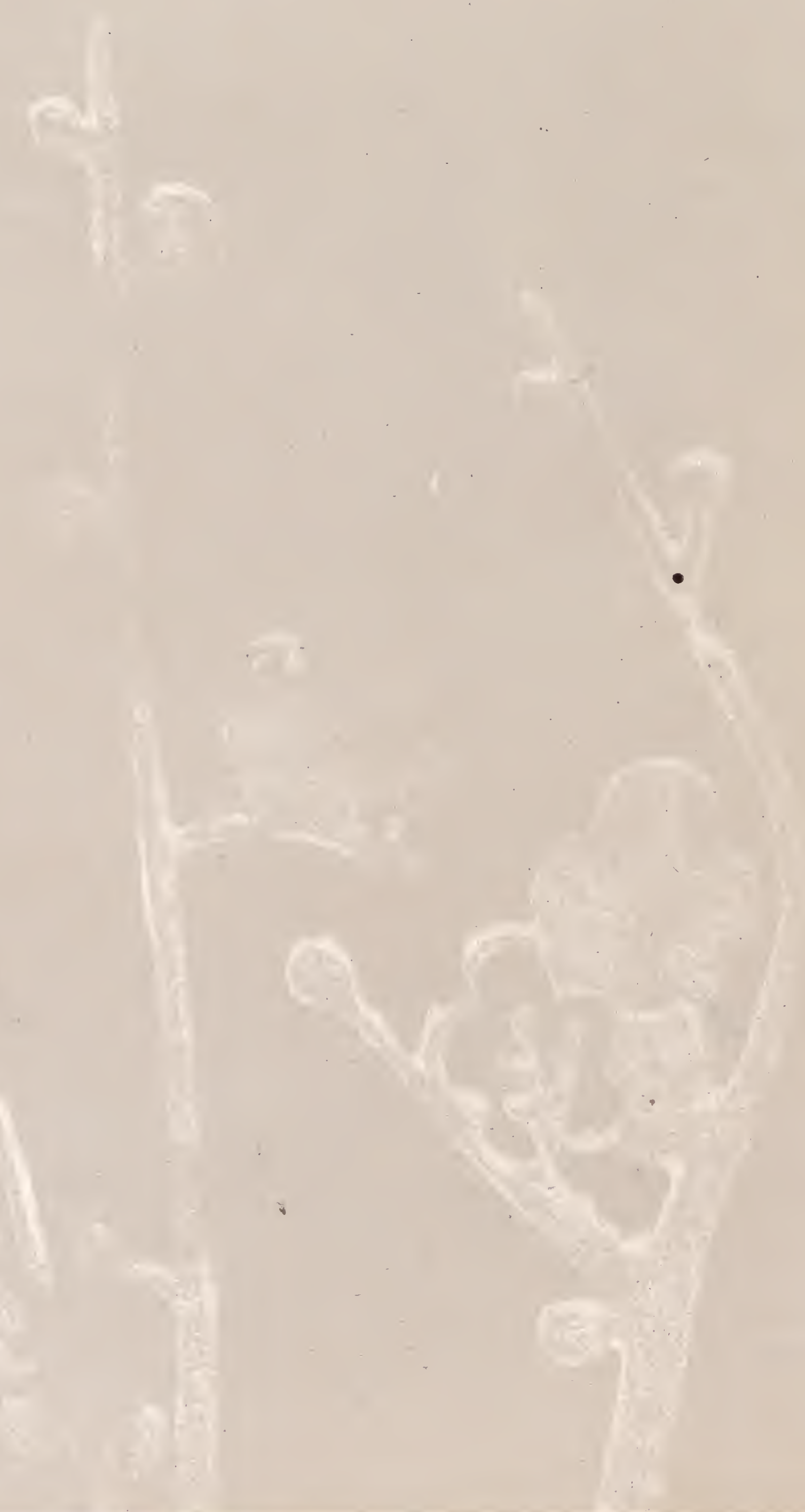
乃延山もわ出る俗もる人取

孫の流生を濟度きそと多直此

望見もる人 種も此度思ひしそ

四國も越山 何れももはるそ

り決る義堂水のく乃るはる



志々々ぬ掃の空月日程なしく福王
きく所をとくたよ然以とふ我
衣手や信江の里よ成早く若小
位者よ若了く慈溪止や村あり
探ふ是成菴日痛をくりや也
思ひ旅つよけ屋のくちへ案内

詞

中旅 きくよ如松風を蟹の宿よ
通ふ此の色たまき乃慈く旅
人もなしくもはゆめ家折中
人々旅や
是冬

三十一

三十一

三十一

無縁の河つよくく一木乃宿を
借る人 実く虫家の侍り
夜ハ利益成へき旅たき旅

詞

あゝあゝ乃きおくをちよぬ乃

こやのしよせとく何とは方鏡

をりあうき 早し 早し

りよせとくあわくは梅は立寄

方な一咲きわとく冬一妙人

早

実や雨降日もと秋竹の一穂を

心と勢おくとく 早け方へ電

のぬ露の薄乃霜はう秋たくと

袖をふくしき了は泊屋あや

旅人 上 西社よ雲をくるとく

東南よ東海雨のあけけやとく

降晴る月よなとく 早 早 也 早 也

位吉の松は風も心しとく 早 早 旅人乃

春を覚ひなとく 早 早 早 早 早

羊

中へ羨子ののい

三

何事かこころ

こ袂よりきこわたる大教のい

舞の志業乃ん不習ふちうらん

三

実しくは不習は是ハ人の邪見

まらん是よは又衰成物語乃ん

ロキ

後行るやせ中い有る

清物語らん

三

者當國天王寺に

清るといひり人あま回

は住言よあとも人あり

それう肉業由業終乃役者を

あううひまに朝よのかまに

中へは屋くを終りるよまはる

あま万やひるひ小思ひのし

あやまはる付せぬもは富さ

妻おつとのふを忠一ひつて
大敷をうけて慰い——うれも
泣井の雪川——冬なをうらな
たう——吊て籠まうく
集くぬりるこいぬきし
西さの妻の好うわ乃ひの
ま——
心やと——
詩

うらな好うおつともまきむ世後乃

好うわえし——あはこ——

初冬何とくけ物語源寺思ひの

さよゆを涙なる——あふらや

なふ何きも女に思ひあ——

よ恋慕乃涙よ志津草をながる

あふれんは涙を——
猶も

三詩

羊上

詩

詩

羊上

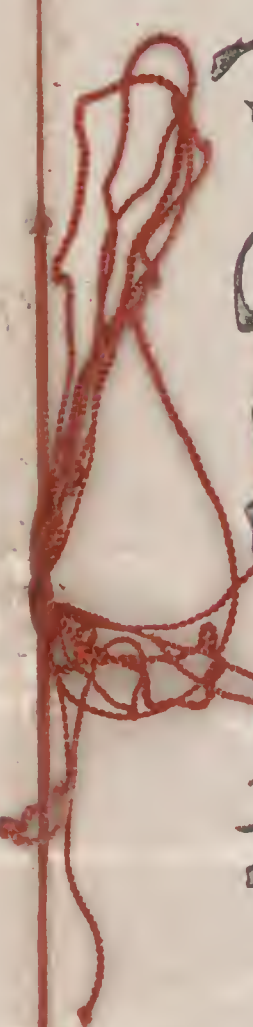
不審ハ残るまわ形見の大教邪
見の本爰ハ皮のちハ好ふく
主ハ者ヨ成ゆき大教ハ括し
こけむーろ
この法代ハ
池水乃く忘るまを有る物を
又立ぬる執心をこけむ好くと

以ハすくこけむけすらるるに
失ふらわ 夫ハ法様くまわと
一世乃法佛の出世乃本懐ハ生
成佛の直さなわ
女人成仏物ハ
化禁天王二考毒物三考魔王四

老轉輪皇五老佛乃云河女方
及以成佛河極ひのあり海乃
少のき物心越りしきさる色
妙くや 文ハ美を法考く
一不成佛もき一度は院を
伊人成仏さるしとちとなり
只れぬ之儀もしや吊ふ妙乃影

もちもきし人の子
夏、現りみたりもなき安か
ふきや那みもは女燈の染
かあり舞乃衣裳を地也
なつとのしふしや極ハ
あはる富士の素の毛色雲小く
まー下し。 実や碧玉の寒を

下三
枕のえよ残る 枕心を
ほつ 偏所よ玉は
このあや 思ひ出さる
あふハ 屋まふ せ
さうろ せく 枕薬
た 枕房 思り
なも 位吉の 鬼
なも 位吉の 鬼



ト
なも 位吉の 鬼
あき さまぬの 玉
このあや 思ひ出さる
あふハ 屋まふ せ
さうろ せく 枕薬
た 枕房 思り
なも 位吉の 鬼
なも 位吉の 鬼

心もともよは住吉の
 まはのひもわなるを祈え
 波もくおへる淡路の澳も
 志津くも青海は青海波の波
 加へて返しや袖の折をええ
 軒端の梅も春乃さなぐや
 都乃越殿樂うらんやうる色

梅の文梅の文よさう春乃
 心をへ風あははつ小さき
 花よ春とあうらん寸面白や
 春のくち春よ後引さう春乃
 春乃うけよ春にたわわ春も
 法水の春さうらん春くち
 月前よ春く春の袖の秋さう

女乃おほと哉さふはむま恋此
 樂の敷う所なるかわり百核屋か
 思くちりしをく後る身
 か残も物心うせり月もりか
 喜樂乃をともれ松風よたぐりて
 ありはまのそあきと旅よ面影
 らうわやのこあそびく

